

愛知 文化財 埋蔵

No. 34



一色青海遺跡 (中島郡平和町、稲沢市)

調査は、日光川下水道浄化センター建設に先立つもので、発掘作業は本年度5月から開始している。検出できた遺構は、弥生時代中期末（A期）と、中世（B期）にまとまりをみる。A期の内容は、方形周溝墓6基で構成される墓域で、検出された方形周溝墓には、一辺12mと、一辺7mの二種類の規格がある。いずれも時間差はほとんど認められず、部分的には周溝の共有も認められる。写真は、Aa区で検出された方形周溝墓で、規模は一辺12m、西溝は調査区外となっている。周溝の埋土中より、まとまって土器が出土している。また、方形周溝墓に切られて、中期末の住居跡が数棟検出された。

B期の遺構としては、方形土坑16基が検出された。現状では、主軸方向の共通性、分布域の濃淡等の特色を指摘できるに留まる。良好な出土遺物に恵まれず、年代を特定することは困難であるが、いくつかの土坑からは、埋土中から東海地方北部系灰釉系陶器の小片が出土している。（調査研究員 池本正明）

シリーズ ものの移動を考える 2

S字甕からみた東海系土器の移動

古墳時代初頭に濃尾平野を中心とする伊勢湾沿岸地域の土器群が広域に拡散し、各地の土器様式に大きな影響を及ぼすことはよく知られている。なかでもS字甕は、その特徴的な形態、拡散する範囲の広さから、特に注目される器種である。以下、S字甕の動向から古墳時代初頭の土器の移動についてみてみよう。

S字甕

S字甕は弥生時代の終末に、濃尾平野から三重県の伊勢湾沿岸部にかけての地域で成立した。その特徴は、S字状に小さく屈曲する口縁と、脚台をもつ台付甕という点にあり、体部は熱効率を上げるために極限まで薄く仕上げられる。現在、濃尾平野の資料をもとにO・A・B・C・D類の5類に分類されており、後続する台付甕である宇田型甕も含めると、2世紀後半から6世紀前半まで約400年間使われた甕ということになる。

S字甕の拡散

古墳時代初頭(廻間Ⅱ式)には、S字甕をはじめとする東海系土器群が列島各地へと拡散を開始する。その範囲は九州北部から東北南部にかけての広いものであるが、時期的な分布の変化も認められる。

拡散初期にあたるA類(廻間Ⅱ式初頭)の分布において、4つの基本ルートが認められる。大和を経由して瀬戸内、九州北部へと至る畿内ルート、近江北部を経由して北陸へと至る北陸ルート、信州を経て北関東へと入る東山道ルート、太平洋沿岸部に点在する東海道ルートである。S字甕A類の段階には、各地を結ぶルートの基礎が形成されたことが窺える。

B類(廻間Ⅱ式)になると先の基本ルートをさらに延長し、より広範にS字甕が分布するようになる。ルート上の各地域でも出土範囲が広がり、分布がより面的に展開するようになる。出土点数も大幅に増加し、S字甕拡散の最盛期を迎える。

ところが、C類段階(廻間Ⅲ式)に至って分布に大きな変化が生じる。全体的には分布範囲が縮小し、出土遺跡数も著しく減少する。特に顕著なのが東山道ルートで

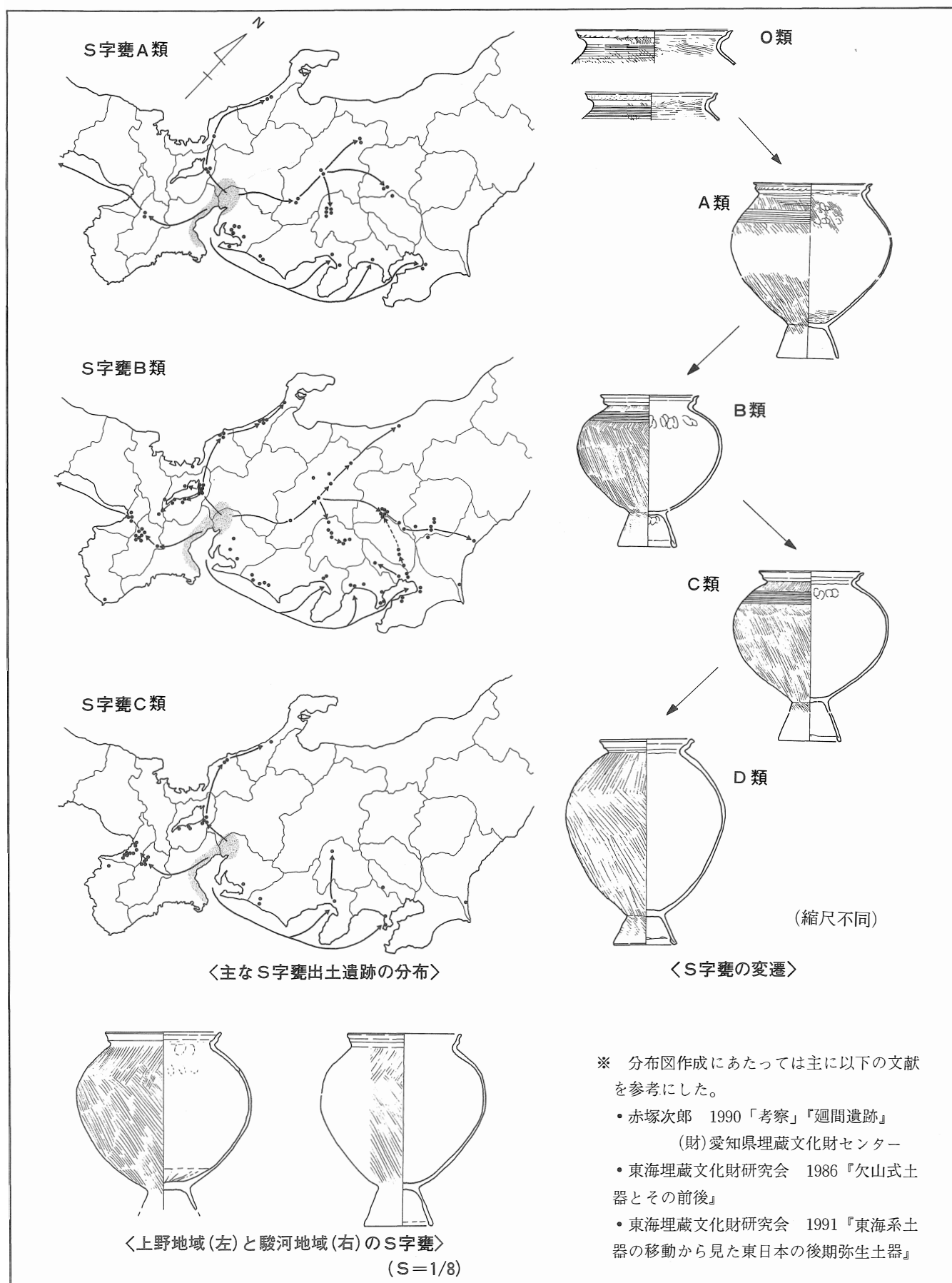
全くといっていいほどS字甕C類は出土していない。北陸ルートでは、近江北部から南部にかけて一定の出土例があるものの、北陸では明らかに減少している。東海道ルートも同様に減少傾向にある。これら3ルートとは対照的に、安定してC類を出土しているのは畿内ルートである。大和ではB類に比べ減少はしているものの一定の出土例があり、大阪湾沿岸部ではむしろこの時期に出土例が増加している。S字甕C類にみられた分布の傾向は、次のD類も基本的に同じである。

S字甕の在地化と二次的拡散

上記のS字甕の分布は、伊勢湾沿岸地域から持ち運ばれた搬入品、ないしはそれを真似て作られた模倣品を対象としたものである。S字甕A・B類の波及した地域では、これらの搬入品・模倣品をもとに、独自のS字甕の生産を始めたところもある。現在知られているのは、埼玉県北部を含む上野地域と駿河地域の二地域で、在地産S字甕が組成のなかで一定の比率を占め、伊勢湾系S字甕の流入が減少するC類段階以降もS字甕の製作が続けられている。しかし、その型式変化は伊勢湾沿岸地域のそれとは異なり、地域独自の変化(在地化)を辿る。

上野地域や駿河地域で製作されたS字甕が、さらに別の地域へと移動するケースも知られている。伊勢湾沿岸地域のS字甕の拡散とは別の、二次的拡散として区別しておこう。まず、上野地域のS字甕は隣接地域である信州東部佐久地域に出土例がある。駿河系のS字甕は相模を中心に大量に出土している他、甲斐を経由して信州南部にまで及ぶ比較的広域な拡散が知られている。これらの二次的なS字甕の拡散現象が、伊勢湾系のS字甕が東日本において分布を縮小する時期に起こっているのも興味深い点であろう。

S字甕の拡散が始まるのは、各地に前方後円墳や前方後方墳が築かれる直前の時期にあたることから、古墳時代の開始に向けての政治的な人の移動が背景にあると考えられている。しかし、移動の実態を含め、今後検討すべき課題が多く残されている。(調査研究員 原田 幹)



◀遺跡紹介▶

田所遺跡(A～D区)

一宮市

田所遺跡は、一宮市光明寺大字北道手を中心に、犬山市を扇頂とする扇状地形が海拔10m前後で沖積地形へと移行する扇端部となる地形上に位置している。

本遺跡は東海北陸自動車道の建設に伴う事前調査として平成5年度より発掘調査を実施している。平成4年度に発見された「墳墓堂」は南100mに位置している。

調査は、現行の道路が調査区内を東西南北方向に十字



土器出土状態

状に走っているためA～D区の4区に分割して、上半期の発掘調査工程として、4月～10月までの予定で実施している。現在までにA・D区の計3,700㎡を調査完了した。これまでの成果を基にして本遺跡を概観してみる。

調査にあたり南の「墳墓堂」とのかかわり合いが注目されたが、13世紀代の遺構・遺物は希薄で遺跡の中心をなすのは、3世紀代の古墳時代前期であることが判明した。遺跡より確認された遺構・遺物は、弥生中期の貝田町期の壺・甕が最も古く、若干の遺構も確認できるがその継続性はなく、空白期間をへて本遺跡の中心時期を迎える。3世紀代の遺構は全調査区で多数の土坑・溝を確認した。その特徴は短期間の営みのなかで集中的に遺構・遺物を残していることにある。特に、土坑では廃棄された状態で多量に土器が出土しており、また1点ではあるが、膝柄鍬の発見は注目されよう。その後、奈良～平安期の須恵器の出土が目立つが、遺構は希薄となる。こうした傾向は、中世期も続いて認められる。いまだ調査途中ではあるが、3世紀代の尾張北部の様相・美濃地方との関連を言及する場合、重要な遺跡となろう。

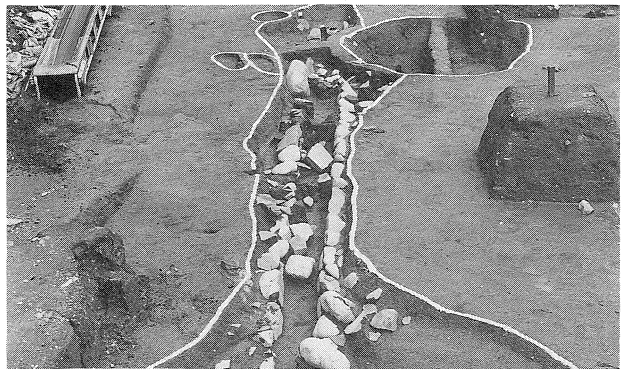
(調査研究員 高橋信明)

名古屋城三の丸遺跡

名古屋市中区

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋台地の北西端に立地する。「三の丸」という区画は、近世城郭の中では家臣の居住域として機能していた場合が多いが、名古屋城もこの例に漏れない。

今回の発掘調査は、愛知県による「三の丸共同施設」建設工事に伴う事前調査として、平成5年4月より開始し現在継続中である。調査地は旧名古屋営林局の敷地内で、三の丸地区内の発掘としては8例目にあたり、調査



近世石組み溝

予定面積は3,400㎡である。調査地は三の丸内では中央南端の旧本町御門に近く、北辺を中小路、南辺を南御土居筋、東辺を御太鼓櫓筋、西辺を大名小路に囲まれた区画内に所在する。この区画内には、大小併せて5～6軒の屋敷が近世を通じて配されている。調査区内には、東西に3軒分のほぼ同幅の屋敷地が並立している。この屋敷地に主として居住した人々には、渡辺半蔵（一万三千三十石）・横井万之助（六百石）・松井雄之助（四百石）などがあげられる。

調査区における北側壁面の土層からは、近世の遺物包含層の間に、整地土層と思われる熟田層ブロックが多量に混じる土層が、ほぼ全体にわたって観察できる。この層を指標として上下2面で検出を実施することとし、現在北側調査区の上面を終了し、下面の掘削を実施中である。

上面で検出した遺構は、溝12条、土坑220基、柱穴、井戸数基等である。遺構内または包含層中の検出遺物は、18C末～19C初頭のものが多くみられ、屋敷代えに伴う遺構掘削及び整地と思われる行為も、この時期の可能性が考えられる。

(調査研究員 松田 訓)

◀市町村だより▶

水神貝塚

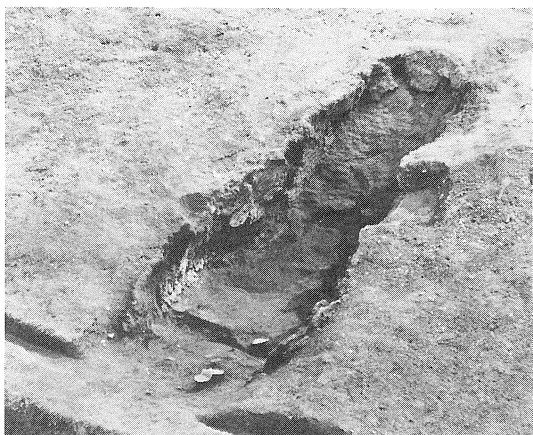
豊橋市教育委員会



水神貝塚(第2貝塚)は豊川左岸の台地西端部、沖積地に形成された砂堤上に位置している。貝塚は縄文時代晩期後葉(五貫森式~檜王式期)に形成されており、約50m×20mの規模で、平面形は隅丸長方に近い形をしている。貝塚を構成している貝の種類は99%がハマグリで、その他、シオフキ、カキ、アカニシなど現在まで18種以上が確認されている。貝塚は、貝層と風によって堆積した砂層とが交互に堆積し、貝層は最も厚い所で1.5mを測る。今回発見された遺構は、集石、土壇、溝、地床炉(約400箇所)等がある。地床炉内(五貫森式時期)からは、イネのプラント・オパールが検出されており注目される。出土遺物には、縄文土器(西之山式~檜王式)、磨製石斧6点、石鏃2点、貝輪、南海産イモガイ貝輪、貝穿孔品(数100点)、弥生土器、イモガイ貝輪、須恵器、埴輪、陶器がある。(豊橋市教育委員会 岩瀬彰利)

姥子古窯跡

豊明市教育委員会

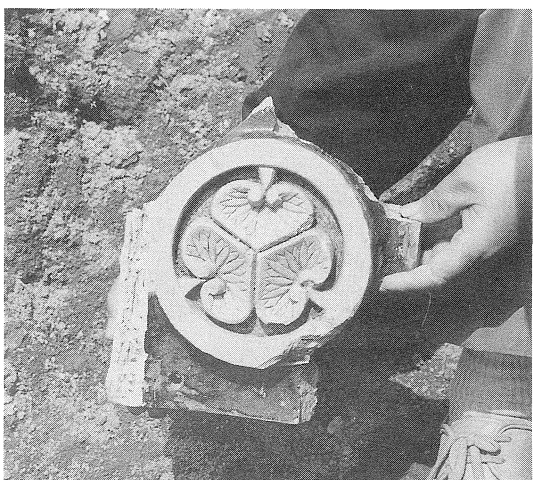


姥子古窯跡は豊明市栄町姥子に所在する、灰釉陶器末期の折戸第53号窯式期の窯である。名鉄本線前後駅の南350m、北西から南東に延びる丘陵先端近くの北東側斜面にあり、猿投山西南麓古窯跡群の鳴海有松第6号窯あるいは桜ヶ丘古窯とも呼ばれている。周辺一帯の土地区画整理事業にともない窯跡が削平されることになり、平成5年7月中旬から約1ヶ月間にわたって発掘調査を実施した。

窯跡は標高12~14m、約25度の傾斜面にあり、窯体の天井部は崩れていたが、比較的全形はよく残っていた。焚口から煙道部上端までの長さ4.3m、焼成室の最大幅1.5m、焼成室の床面傾斜角45度を測る。分焰柱の痕跡を確認した。前庭部と灰原は等高線方向に延びる農道による攪乱を受け、農道下で16mにわたって椀・皿類と黒色灰層が広がっていた。灰原からコンテナ約100箱分の遺物が出土した。(名古屋明德短期大学 松原隆治)

名古屋城三の丸遺跡

名古屋市教育委員会



調査地点は、江戸時代徳川将軍家の御霊屋が建てられていた場所にあたる。調査の結果、仏殿を飾ったであろう鉄釉瓦が大量に出土し注目された。

写真の資料は、表に手彫りの三葉葵を配した鉄釉道具瓦であるが、裏面には「延享二年十一月」(1745年)の年号と「御瓦師」「瓦し」の名前がヘラ書きによって、また別に「焼師」の名前が鉄釉の筆書きによって記せられていた。紀年銘資料の重要性は言うまでも無いが、瓦師と焼師の分業も明らかであり重要な資料になろう。

この他にも、「三葉葵に金箔を貼った鬼瓦」や「龍の飾り瓦」などがあり、将軍家の御霊屋建築を復元するに貴重な資料を追加した。

なお、前年度の調査では、戦国時代の屋敷地(那古野城関連か)を区画する溝や、5世紀代の古墳2基も発見されており、今後の下層調査の成果にも期待している。(名古屋市見晴台考古資料館 服部哲也)

発掘調査ニュース

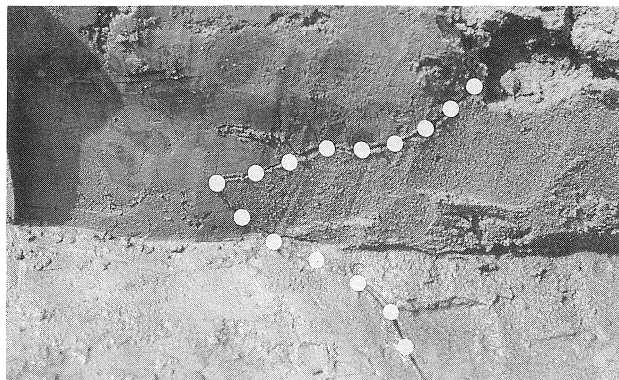
田所遺跡の地震痕

濃尾平野の北部に位置する一宮市田所遺跡は1891年に発生した濃尾地震の影響を大きく受けている。この影響は発掘調査の際に地震痕として確認されているが、同時に濃尾地震以外の地震痕の存在も明らかになっている。

昨年度実施した92A区の調査では、①濃尾地震の地震痕、②中世の遺物包含層の上位に広がり近世の遺物包含層に覆われている地震痕（1586年発生の天正地震または1498年発生の明応地震に相当）、③古墳時代の水田を突き破り奈良・平安時代の遺構に掘り込まれている地震痕という3時期の地震痕が検出された。

また本年度の93Da区においても、④古墳時代前期の遺構に影響を与えた断層が検出されており、複数の地震被害の記録が残っていることが明らかになった。①、②の地震痕は、天正地震を記した『当代記』をはじめとする文献に登場する地震記録に対応しているものであるが、

③に相当する地震痕は文献には登場しないものである。この時期に近畿・四国地方では白鳳南海地震(684年)が発生しており、同時期に発生したと思われる東海地震の存在を証拠付けるものとなる。さらに、④に相当する地震痕は、③と同時期あるいはそれ以前の時期の地震によるものと考えられる。田所遺跡で発見された歴史時代の複数の地震痕は、遺跡に及ぼした災害の歴史を復元するばかりでなく、地震発生の規則性の解明による将来の地震予測にも貢献できるものである。(調査研究員 服部俊之)



7世紀末の地震による“噴砂”(白点の右側)

埋蔵文化財展・講演会終わる

平成5年度埋蔵文化財展・埋蔵文化財講座は、7月24日から8月8日まで新城市ふるさと情報館・文化会館で開催された。

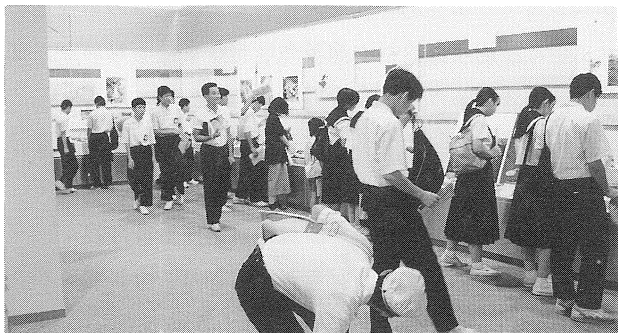
平成3・4年度に発掘調査した遺跡の新出土展をテーマとした埋蔵文化財展には、会期中1,600名もの入場者があり盛況であった。

また、今回初めて行った埋蔵文化財講座は、「島田陣屋遺跡と弥生時代」・「堀之内花ノ木遺跡と尾張古代寺院」・「清洲城下町遺跡と戦国時代」をテーマに、調査研究員がそれぞれの調査成果を報告した。90名もの受講



者から数多くの質疑が出され活況を呈した。

埋蔵文化財講演会は、國學院大学文学部教授の小林達雄先生を講師に「縄文姿勢方針」という演題で行われた。いまだ土器編年に堕している縄文文化研究を否定し、縄文文化の総合復元を目指して、縄文文化の今日的意味を考えなければならないとの提言は、大いに共感された。



埋蔵文化財愛知 No.34

発行 平成5年10月1日
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田
字野方802番24
TEL 0567-67-4161~4163
印刷 株式会社 クイックス